



Title	中国語の三人称代名詞”它”に関する研究
Author(s)	西, 香織
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58763
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	西香織
本籍(国籍)	
学位の種類	博士(言語文化学)
学位記番号	甲第22号
学位授与年月日	平成15年3月27日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	中国語の三人称代名詞“它”に関する研究
論文審査委員	
主査 教授	杉村博文
副査 教授	佐々木猛
副査 教授	仁田義雄
副査 教授	富田健次
副査 助教授	田野村忠温

論文の内容要旨

現代中国語における三人称代名詞“它”は、人間以外の動物や植物、事物、事柄など実にさまざまなものを持続対象としている。現在、人間を指示する“他／她”と“它”は文字の上では異なっているものの、本来は同じ一つの語であり、同じく/tā/と発音されている。

しかし、人間を指示する“他／她”と事物等を指示する“它”には、その用法や使用頻度など運用面でさまざまな差異が見られる。これまでの中国語の三人称代名詞の研究において、“他／她”に関する研究は比較的盛んに行われているが、“它”に関してはほとんど研究が進められていないと言ってよく、両者の共通点・相違点についてもいまだ明かにされていない。そればかりか、“它”は「欧化」によるもの、という烙印を押され、長い間、研究に値するものとはみなされて来なかった。しかし、事物等を指す用法は早くは宋代より見られ、「欧化」はその用法の一部分に影響を与えたにすぎない。

“它”は、実際には“他／她”ほど純粹に代用のはたらきを担う代名詞ではなく、特に、ゼロ代名詞(zero pronoun)の発達している中国語においては、相対的に有標(marked)の代名詞であると言える。また“它”は“他／她”的ように直示的(deictic)用法を持たず、照応的(anaphoric)用法のみを有することから、談話の「結束性(cohesion)」に寄与し、談話においても大きな役割を担うことになる。したがって、“它”的用法の発展過程や運用状況及び“他／她”との運用の差異を明らかにすることは、中国語の談話構造を理解する上で大いに役立つものと考える。

本論では、主に無生(inanimate)のものを指示する“它”について考察し、その「照応性」という特徴から生まれるさまざまな談話における機能について分析した。

第1章では、“它”が中国語の指示体系の中でどのように位置づけられるかを把握するため、現代中国語をはじめ、古代中国語、近代中国語における指示体系を示し、三人称代名詞が指示詞から分化し、一・二人称代名詞と鼎立するようになった過程を追った。さらに、これまでの研究や用例をもとに、／tā／という語が発展し、人のみならず、動物や事物等も指示する用法が現れるようになった時期、虚指的用法が生まれた時期を確定し、その当時、どのように用いられていたか、その後、どのように発展していったかについて通時的な考察を行った。

人を指示する用法は、遅くとも唐代末には成立していたと考えられるが、動物や事物等を指示する用法は、やや遅れて宋代に入ってから成立したものと思われる。しかも、北宋の作品にはいまだ少なく、比較的多く見られるようになるのは南宋の頃で、口語的色彩の濃い『朱子語類』には比較的多く見られる。／tā／が三人称代名詞として成立した当時は、否定文や反語文など、話し手の指示対象に対する不満の気持ちや、怒りといった否定的な態度を示すものが多く、主語の位置に使用されることは極めて稀であった。人を指示する用法には現在このような特徴はほとんど見られないが、事物等を指示する用法には、現代まで延々と引き継がれている。

しかし、元代・明代に入って、事物等を指す用法はほとんど発展せず、再びこの用法が見られるようになるのは清代に入ってからである。この頃には、事物等を指す例も増加し、これまでに見られなかった新たな用法も見られる。

第2章では、現代中国語に視点を移し、主に共時的な三人称代名詞についての考察を行った。特に、「欧化」以前と「欧化」以降の“它”的最も相違する点を明らかにするため、近代中国語、現代の口語(方言を含む)における使用状況を観察し、“它”的本來的な用法について分析した。

“它”は本来、口語においてのみ使用されていたもので、その用法は現在の口語にも受け継がれているが、書面語ではほとんど使用されない。一方、「欧化」の影響を受けてできた新たな用法は、主に書面語にはたらきかけたために、同じく“它”であるにもかかわらず、書面語と口語でその用法、使用状況等に大きな差異が生じたと言える。“它”的本來的な用法は、常に話し手の何らかの感情的色彩を伴い、それに対し、多くの場合は否定的な評価を加えるものであったと考えられる。したがって、「欧化」以前であれば、平叙文や一般疑問文には使用されず、疑問文の形式をとれば反語文に理解されるといった傾向があつたが、「欧化」により、無色の用法が生じ、また、“它”自身が談話において機能する三人

称代名詞としてより一層の発展をしたため、現在、特に書面語においては文型にとらわれることなく比較的自由に“它”を使用することができるようになった。

第3章では、“它”的「照応性」という特徴に焦点を当て、さまざまなレベルで捉えられる照応の中での“它”的はたらきについて考察した。“它”は先行コンテクストにある先行詞に照応することで自らの指示対象を決定する。また、通常は先行詞に示された情報そのままを受け継ぐが、時に何らかの推論を経て指示対象が決定されることもある。しかし、いずれの場合も明示的な先行詞が必要で、しかも指示対象が談話において既に話題となっていることが前提となる。また、“它”と先行詞は單文内に共起することは少なく、主題化文の中で文の主題となっている先行詞を承けるか、因果関係や転折関係にある複文、あるいは文と文との間に時間的差異や小さな話題の変更がある場合に“它”が使用されることが多い。“它”的「照応性」という特徴は談話の「結束性」に寄与するが、“它”は通常、語と語の意味関係、すなわち「関連性」により自らの先行詞を確定する。この点で、「結束性」というのはきわめて意味的なものであると言える。

第4章では、“它”的指示対象及びその先行詞の形式に着目し、どのような指示対象がどのような形式を用いて談話に導入され、“它”で受けられるのかについて考察した。裸の名詞句は主にある概念など抽象物を指示するのに用いられ、指示詞付きの名詞句は談話の場にある具体的事物や事柄等を指示するのに用いられるなどの特徴が見られた。

また、指示対象によっては、“它”を用いることにより、話し手の腹立ちや怒りあるいは喜びなど特別な感情的色彩を帯びることがある。それは特に指示対象が具体的な事物である場合に顕著である。

“它”的代名詞の使用は、話し手の指示対象に関する知識状態と密接な関わりを持つ。話し手が指示対象に関する知識を持たない場合には“它”を用いて指示することができず、他の形式を用いなくてはならない。つまり、“它”を使用することで、話し手は自分がその対象を知っているということを示すのである。この意味特徴を利用して話し手の否定的な態度を表したり、逆に聞き手に対する敬意等を表すことがあるなど、“它”は語用論的な面でも大きく活躍している。

第5章では、事物等を指示する“它”と人間を指示する“他／她”的さまざまな運用面の差異は、人間の「有生・無生」に対する認知の差異を反映したものであるという仮定の

もと、“他／她”と“它”の差異について分析した。人間は有生性、個体性の高いものに対してはよりそれに対する分類が細かく行われるが、逆に、有生性、個体性の低いものに対しては、積極的に分類を行おうとしない。そのため、人間に対しては、一人一人を個別に認識するが、事物に対しては、それを類として認識していて、ある一個体を指す場合でも、常にその背後にそのものの属する類を意識していると考えられる。

また、“他／她”と“它”は代名詞の段階での差異のみならず、それぞれの先行詞の間でも、両者の統語的ふるまいに差異が見られる。“他／她”と“它”的差異については、これまで、人間を指示する“他／她”は統語的な制限を受けず、主語、賓語、定語等、いずれの位置にも使用できるが、事物等を指す“它”は主語の位置には使用できない、と言われてきた。しかし、実際の談話において、“它”が主語の位置に使用されることには決して少なくない。

本章では、“它”が主語の位置に使用されている例を小説の会話部分等から集め分析した。その結果、“它”は“是”や自動詞が使用されている述語と相性がよく、ある対象に対する判断、属性や特徴づけ等といった意味あいを持つことが多いことが分かった。

さらに、指示対象が具体的かつ特定的(specific)な事物であっても、“它”を用いた段階で、総称的(generic)に解釈されるという現象が見られたが、人間を指示する場合には、このような現象が見られることはきわめて稀である。このことは、まさに、無生のものは類として捉えられる傾向が強いということの傍証となる。また、談話という観点から見ると、主語の位置にある“它”は、談話の小さな切れ目を示しながらも、ある話題が文を越えて続いていることを示す marker であり、また、多くの場合、先行詞と同格関係となる文内照応においては、主題を顕在化する働きを担っていると考えられる。

論文審査の結果の要旨

本論文は中国語の三人称代名詞“它[tʰə⁵⁵]”およびその複数形“它们[tʰə⁵⁵mən]”に関する、現代語における語用論的考察を中心とした総合的研究である。審査は一般言語学（生成文法、認知言語学、言語類型論、語用論）、中国語学（歴史言語学、方言学、現代語法）、日本語学、近接語学（ベトナム語）の視点から総合的に行われた。

本論文は表題テーマの研究に当たり、中国語学の研究成果みならず、一般言語学や日本語学の研究成果をも丹念に涉獵し、それぞれに対し、詳細な言語事実に基づいた粘り強い検討を加えている。とりわけ中国語学における先行研究に対しては、ほぼ全面的に書き換えを行ったと言ってよいほどの批判的吸收が行われている。表題テーマをこれほどの規模で体系的に扱った研究はかつて存在せず、今後の研究の基本文献となる業績であ

ると評価できる。

本論文の不足としては、以下の意見が提出された。

- (1) 歴史資料の扱い方および歴史言語学の概念の適用に慎重さを欠くところがある。
- (2) 一般言語学概念の個別言語学に対する適用に説明の明晰さを欠くところがある。
- (3) 一が分かれて二になる現象の理論的総括（例： $t^h a^{55} >$ 他，它；もの > 者，物）が不十分に思える。
- (4) 上記(3)と関係するが、音声言語にない区別を文字言語における区別で正当化しうるものか、その妥当性を今少し疑いたい。
- (5) 近接言語研究の知見を取り込みたい。
- (6) アドホックな解釈が若干見られる。

本論文には以上のような不足が認められるが、総合的に見た場合、全体の議論は周到かつ精緻で、非専門領域の者も触発されるところの多い好論文であると評価された。

なお、審査に先立ち、主査より、西香織が過去三年連続して日本中国語学会全国大会で研究発表を行なっていること、並びに本論文中の二つの章がすでに独立した論文として、日本中国語学会誌『中国語学』（第247号、2000年；第249号、2002年）に採用掲載されている旨の紹介があった。